

第5章 大学として何ができるか

1) 今期の委員会では、「学生の元気を育てる」という課題については全ての委員が重要であることについて一致した。しかし「学生の元気」をどうとらえるか、いま「元気」がないように見える学生をどうするかという点では最後まで議論が続けられ、さまざまな視点が提示された。

「学生の元気」を、学生がさまざまな活動をし、積極的に勉学に取り組み、就職活動においても自信を持って進めることができること、キャンパスでそうした学生の姿が見られるといったこととしてとらえることはだれもが異存ないだろう。しかしこれも細かく考えればそう簡単にはいえないことがわかる。全ての学生が上記のような意味で「元気になる」べきか、実際そうなることができるか考えるのか、「元気でない」学生に元気にせよといって元気になるだろうか。おとなしい何か問題でもあるように見える学生がある日突然に「元気」になることもしばしばある。こうした変化が現れたとき、それは教員や周りからの働きかけの結果ばかりではないだろう。つまり学生に対して「元気になる」可能性を諦めないとともに学生それぞれの個性を尊重して画一的な学生のあり方を求めないことも大切である。就職力を高めるためには、面接の練習などをすることも必要であろうが、クラブやサークルなどの自主的活動の経験とともに大学で何を学んだかを面接等で答えられることも重要である。その意味でも、大学として究極のところ卒研をはじめ勉学にしっかり取り組むことが「学生の元気を育てる」ための重要な要素となる。しかし勉学をせよとストレートにいうだけでは「元気を育てる」ことにならないだろう。

こうした委員会での議論をふまえ、本章はこの報告書のまとめとして大学としてできること、すべきことについての提案をのべるが、それに先だって一つの見解を紹介したい。なお、この委員会の審議をしているとき、本学の改革に関して長澤泰副学長が学内に求めた意見には多くの関連する意見が出されているものと考ええる。今後これらの意見も踏まえて「学生の元気を育てる」ための施策について学内で活発な議論が行われ、適切な方向が打ち出されることを期待したい。

2) 自立を支えるものとしての学問の再評価

『学生の元気』が今回の自己評価の課題であった。最近の学生は何か元気がないという教員の漠然とした感想から発せられたものであろう。しかし、改めて学生は元気かどうかと問われると答えに窮する。多様な学生がいて、その元気さにも幅があるだろうし、そもそも何をもって元気とするかも難しい。高校までとは異なり、大学教員は学生の日常に深く関わっているわけではないので、彼らがどれだけの希望を持ち、どのような不安や悩みを抱えているのか、あまり把握できていないというのが現実であろう。

ところで大学生は、心身の大きな変化を経験する思春期を過ぎ、自己を再構築していこうとする青年期を過ごしている。これから経済的自立を目指し就職というハードルに立ち向

かいながら、現実社会と自己との折り合いをつけていく時期でもある。心もとない不安感と希望の狭間をさまよっている学生たちの様子は未成熟で不安定にも映るが、これをもって彼らが元気でないと断じることは早計かと思う。希望や元気というのは相関イメージを結びつけやすい一方で、不安や悩みというのは元気とはかけ離れたもののように見える。しかし、不安をもたらす何かに直面したとき、それに対して徹底的に思い悩む力もまた元気ではないのか。希望と不安はベクトルの方向が逆だけであって、そのベクトルの大きさこそが元気の度合いにあたるとも考えられる。

青年期を高等教育の場で過ごす学生たちがさまざまな不安にさいなまれるのは今に始まったことではない。例えば、明治の文豪、夏目漱石の小説『三四郎』においてもその様子はいかがえる。大学予備門という、全国から選りすぐりのエリートが集まった学問の場が舞台である。主人公の三四郎はそういった地方から出てきたエリート学生の一人であるが、都会の刺激とアカデミズムに触れながら漠然とした不安を抱えている。本書ではその戸惑う様子が克明に記されているが、アカデミズムの場という近代化の象徴のような舞台ゆえの不安がそこにある。その根底にあるのは急速に進む近代化、つまり新しい社会に対する戸惑いであった。政治学者の姜尚中氏の言葉を借りると、近代以前、人が何を信じ、ものごとの意味をどう獲得するかという問題は、信仰によって覆い隠されていた。しかし、近代以降、その覆いがはずされ、個人にすべての判断が託されてしまった。そのため解決しがたい苦しみに人は直面するようになったという。なだいなだ氏（精神科医、作家）は、古い社会は一人一人が決められた通りに生きる社会であったのに対し、新しい社会は人が自由に生きていくことが許される代わりに、各自がそこで遭遇する出来事を自らの責任で引き受けなければならない社会であると言う。皮肉なことであるが、現代人が抱える不安は、自らの裁量で生きることを認められた代償としてもたらされたものと言える。前述のなだ氏は、自立とは心が大人になることだが、それは簡単に言えば、不安と付き合えるようになることだという。三四郎の頃より時が進み、多くの者が高校や大学に進学するようになった現在では、誰もが不安と付き合いながら生きていくことを要求されている。

自由に生きると言われても、自分なりの生き方の指針が確立されていなければ、何をして良いのかわからず、なんとも心もとない。明治のエリート学生である三四郎が直面したことは、今全ての大学生が直面していることである。そこに何かしらの希望が見えるなら、恐る恐る不安との付き合い方を学び、自分の生き方を少しずつ確立していけるであろう。しかし、中には漠然とした不安が蓄積し、自分づくりの道筋が見えないまま自由な社会に放り込まれ、思考停止や活動の停滞が起こってしまう者もいるだろう。このように不安との付き合い方がわからず自由を前にして身動きがとれなくなっている一部の者が目立ってしまっていることが、元気のない学生が多いという印象を私たちに与えているのかもしれない。

その不安との付き合い方について、彼らに何かアドバイスできないものかと思いながら、ここでは「希望」という言葉（一見して不安とは違う方向に位置するように見えるが）を

考えることで、そのヒントを得たいと思う。玄田有史氏（希望学を標榜した社会学者）は、希望について「きびしい状況のなかで、先が見えないからこそ、勇気をもって前に進むために必要とされるもの」と述べている。そもそも不安があるからこそ希望は成立し、逆に順風満帆の人生は希望を必要としない。そういった観点から見ると、不安やつらいことに直面したとき、挫けず考え続け大いに悩み続ける、そこから微かな希望に結びつけていける気力こそが元気と考えたい。玄田氏は希望に関するアンケートを不特定多数の人にを行い、それらの回答から様々な結論を導き出している。その中で、人に希望を持ちやすくさせる要因の一つとして、挫折体験と修正体験を挙げている。「希望の多くは失望に変わる。しかし希望の修正を重ねていくことで、やりがいに出会える」と説く。挫折を味わい厳しい状況だからこそ、自分が希望していたことの本質を問い直す。そうすると自分の生き方に対して違った切り口が見えてくる。不安や困難に対する向き合い方と何か共通するものがここにあるように思う。直面する不安や困難も違った角度から見ると、人生を豊かにする素晴らしい経験に思えたりする。そんなことは誰にもできる事ではないかもしれないが、多様な経験を積み重ね、読書や異文化交流によって言葉や考え方を増やしていくことで育まれるのではないだろうか。

挫折体験と言えば、第一志望としてではなく、むしろ失望のうちに本学に入学してきた者もいるであろう。その場合にも希望の修正を重ねることで工学院大学の中でやりがいを見つけていけたら素晴らしい。そういった観点からすると、元気を育てるために大学のできることの一つとして、学生が修正体験を実感していけるような仕掛けや環境を整えることが挙げられよう。この点に関しては、この報告書においても述べられてきたように、工学院大学はさまざまな実績をもっている。入学早々にオリエンテーションキャンプがあり、同じ釜の飯を食いながら新しい友人たちと語り、他者の様々な考え方を知ることになる。活気あるオープンキャンパスで大学の良さを語る経験を通して、愛校心が芽生え始める。それは彼らのアイデンティティーの確立に一役買っているであろう。鳥人間やロボコンなどの学生プロジェクトの場では、より良い成果を求めて学生同士が真剣勝負の議論を交わす。そうした中で人の批判に自然体で向きあう姿勢を学ぶ。また、失敗の中から次につながるヒントを見つける経験をし、勇気をもってチャレンジできる態度を身に着ける。理科教室では多くの子供たちを前に、さまざまな工夫を凝らしながら説明をする。そうした中で、人に喜んでもらえる喜びを知る。このような多種多様な活動の場で主体的な生き方を模索しながら、工学院大学におけるやりがいを見出した学生も多いことだろう。

それでは、今後さらに学生の元気を育てるために大学は何ができるだろうか。上述のようなイベントは元気を引き出すきっかけとしては良いが、それだけでは何か足りないように思う。やはり大学は学問の場であるという原点に帰りたい。学問は多岐にわたる情報を人に提供する。ときに、知らないでいればよかったものを、学んでしまったがゆえに不安を抱えてしまうこともあるだろう。大衆化が進んだ大学においては、直面する出来事を自らのこととして引き受ける文化に馴染んでいない学生も多く、彼らにとっては大学で学ん

だことが戸惑いの原因になってしまう場合もあるだろう。しかし一方で、学問はそうやって抱えてしまった不安や戸惑いに対してさえも、多くの知恵や言葉を提供してくれる。挫けず考え続け、不安を微かな希望に結びつけていける元気を養う糧として、学問はもっと再評価されて良いのではないか。そして是非、工学院生には学問を通じて元気になってほしい。そのための環境作りを大学の今後の課題とするのはいかがだろうか。その具体案を最後に提案してこの稿を終える。

①昨年行った ISAT special のようなミニシンポジウムを学内で頻繁に行い、卒論着手前の学部学生たちにも聴講させる。それにより彼らは教員の研究者としての一面を見ることが出来る。また、自分たちの先輩（大学院生）の発表を見ることで、工学院大学の研究のアクティビティが高いことを知り、母校に対する誇りを持つようになるであろう。

②異文化交流の機会を増やす。普段接することのない分野のプロを招き、講演会や実演会を行う。音楽会や美術鑑賞なども良いと思う。新宿キャンパスにはオープンカレッジがあってそういう機会に恵まれているが、八王子キャンパスのいぶきホールや新教育棟前の広場をもっと文化的な営みに活用できないであろうか。

③読書を奨励する。ただ、推薦図書として紹介しても、多くの学生はなかなか読もうとしないので、教員が愛読する本について語るような講演会があってもよいと思う。言葉を増やすことにより、漠然としていた不安を整理して考えることができるようになる。

3) 「学生の元気を育てる」ためには大学としての施策だけでなく、全ての教職員が自分の授業や役割、業務を通して意識的に学生に働きかけ支援することが必要であろう。それはそれぞれの立場や役割によって異なるものであり、接している学生の様子によっても異なる。またその教職員の個性によってアプローチの仕方が異なることは当然に認められるべきである。要は大学としても教職員としても、学生に元気になってほしいということを願っていることが学生に分かり、そのためのチャンスがさまざまに用意されていることであろう。教職員各位におかれては、前記の意見やこの報告書の全体を参考にしてそれぞれの立場で可能な取り組みを進めていただきたいと願う。

同時に大学として組織的に取り組む課題としては次の 4 つの事項が考えられる。それぞれの項目で書かれていることはその具体例であってそれらに限るものではない。これらを含め、「学生の元気を育てる」ための施策を積極的に推進していくことが必要である。

①「学生の元気」について、学内で見えるようにする

今回の自己評価の活動を通して本学の学生は、思った以上に「元気」に活動していることがわかった。しかし学内に十分その姿を伝えられているとはいえない。今後さまざまな

手段を通して、「学生の元気」を学内で共有していきたい。それは全ての学生や教職員にとっても「元気」を呼び起こすことになろう。

- ・ 掲示板、垂れ幕などにより、キャンパス内でその活動が「見える」ようにすること
- ・ 教授総会で行っている学生部報告を HP やポータルサイトに掲載し、メールマガジンを発行するなど、ICT 技術を活用した情報伝達を進めること。エレベーターホールの電子掲示板や生協の設置する映像設備の活用も検討すべきであろう。
- ・ 学生向け広報紙（大学新聞）を大学として発行し、学生の活動状況とともに大学の方針や期待を学生に積極的に伝えること

②学生の自主的自発的活動を引き続き奨励し、支援する

本学はこれまでも学生の活動を積極的に支援してきたが、今後さらにその点を強化し、就活などにおいて学生が大学で行った活動や体験を自信を持って説明できるようにしていく必要がある。

- ・ 新入生のオリキャンをはじめ、クラスメイトや先輩と交流し、友達を作る機会をさまざまに作ること
- ・ クラブ、サークルなどの活動を奨励し、活動する学生を増やすこと。このためにも部室や活動場所等の確保を進めること
- ・ 学生プロジェクトなどに対する財政的支援を後援会、校友会等の協力を得て引き続き行うこと
- ・ 大学の行事等での学生ボランティアの参加など、学生が活動できる場面を広げること
- ・ 大会などの学生活動のイベントに際して一般学生の応援参加を奨励すること
- ・ 学生支援部などの支援活動や窓口対応をさらに充実させること

③教育活動を通して学生の「元気」を高める

学生の本分としての勉学の分野でも「元気」に取り組むことをますます促進したい。そのことによって社会にでてから発揮できる実力が身につくことになるだけでなく、社会に出ていく自信が深まるだろう。

- ・ 授業などの学習活動でも討論や発表、インターンシップへの参加、外部イベントへの応募、学会発表、他大学との交流など、学生の能動的な活動を促進すること
- ・ 少人数授業を増やすこと。特に3年生までのゼミの実施をめざすこと
- ・ 授業の内容を学生の学力やニーズに合ったものとする。特に成績のよい学生が満足できる授業を開設すること
- ・ 卒論発表会やインターンシップ報告会など、報告、プレゼンを行う機会を増やすこと
- ・ 留学生との交流会や国際学会の開催・学生の参加など、国際感覚を高める取り組みを進めること
- ・ 教員としては、それぞれの学生が行っている勉学や活動、経験の優れている点を積極的

に評価し、学生が自信を持てるよう前向きに指導し、できるだけ否定的評価を避けること

④学生が大学生活に充実感を持ち自分自身に自信を持てるように支援する

本学の学生の就職力を高めるためには、自分に対する肯定的評価を高めることが重要であろう。そのためには授業や自主的活動を問わず「他」に見てもらい評価される機会を増やすことが必要である。また共同して作業を行う経験や人前で発表する場面を増やすこと、各種のボランティア活動など初めて会う人と話をする経験をすることなどがある。

- ・就活で大学生活を通して行った勉学や学生活動を自信を持ってアピールできるように指導すること
- ・学生の長所・短所などを自己評価だけにまかせず、教職員と面談するなどして客観的なものとする
- ・大学として学生の「元気」を外部に積極的に発信し、外部からの評価を得る機会を増やすこと。これを通して活動に参加した学生に自信を持たせるようにすること

4) これらの施策は、「元気」な学生を増やすことにあるが、すぐに全ての学生がそうなるとは限らない。「元気」な学生が本学にいること、そのことにより工学院大学における大学生活が多様になり、活動に参加していない学生にとっても充実したものとなることが重要であろう。またいまは「元気」でないように見える学生も、明日は元気に活動に参加するかもしれない。あるいは内に秘めた情熱があり、自分を高めるために人に知られないが何かに打ち込んでいるかもしれない。実際、学外の社会人チームやボランティア活動に参加しているものもいる。

悩みや困難を抱えている学生もいる。そうした学生には、学生相談室や健康相談室、学習支援センターなどで対応ができるし、教員に相談することもできる。この点では全ての学生に相談相手となる教員がいるということをめざす必要がある。

何れにしても個々の学生の実情を把握し、できるだけ主体的に積極的な活動を展開して、学業とともに大学生活を充実させ、自分に自信を持って社会に出て行けるようにすることが重要である。それぞれの学生を長い目で見守りながらそうした支援を進めていきたい。

「学生の元気」とは外から見た形である。大学の中にいる学生にとっては充実した大学生活ということが大事であろう。充実した大学生活を送っているが外からは何も見えないというのでは困る、充実した大学生活を「学生の元気」という形に表し、発信したいということが、今期のテーマの含意である。このために積極的に取り組むことが、「学生の元気を育てる大学」ということである。こうした点から学内各部署で、また全ての教職員が自分のできることから取り組みを進めることをお願いしたい。

なお、これらの実践の成果を踏まえて、本学の教育方針、例えばカリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーなどの表現を見直すことも今後の課題となろう。

1), 3), 4) 蔵原委員、2) 南雲委員